

ことわざの世界の探索

—書かれた口承文芸〈ことわざ〉について—

柳 原 佳 子

「言語は『社会的現実』に対する指針である。」(E. サビア)¹⁾。

上述の命題をまさに指針として、言語と社会生活との相互規定的関係に注目し、日常の言語生活のなかで用いられてきた〈ことわざ〉の内容分析を通じて、日常生活者たちの生活規範意識の特性と生活秩序の構造的な特性とを導出しようというのが、筆者を〈ことわざ〉の世界へ誘わせた主要な要因であった。

このいささか無謀なる試みを実行していく過程で「常民の生活の知恵」の宝庫に迷い込んだ筆者は、はからずもみずからの形式的分析偏好の不遜さと若輩ゆえの蒙昧さを暴露することになる。

以下ではみずからの知の追求態度についての反省をも含めて、筆者の時代的・世代的な知の制約、個別的な知の偏りの開示過程を示し、次に、〈ことわざ〉を文字で記したり論じたりする人々に付随する存在拘束性を、異なる三世代に属する先学3人の比較のかたちで索出、あわせて語り継がれてきたことわざを書かれたことばで理解しようとする営み—知で知を洗う抗争—からことわざの内容特性についての仮りの答えを引き出してみたい。

1. ことわざの定義の困難と^{ディスコース}言使用の制約

ことわざ：「近ごろの若いモン」とっての「古語」

①ことわざを定義することの困難

〈ことわざ〉とは何か、この最も基本的な問いに、われわれはまず戸惑う。

この問いに答えるのは、古来の碩学たちにとっ

てもかなり困難なことであつたらしく、たとえば藤井乙男はその『諺の研究』のなかで、ことわざについて、「いまだ完全なる学術的定義を下し得たる者なし、これ畢竟諺そのものの性格の然らしむる所にして、また如何ともすべからざるなり。」²⁾と断言している。

この「如何ともしがたい」性格をもつ〈ことわざ〉をめぐって、多くの研究者たちがさまざまな角度—一言及形式、指示内容、発生経路、語義など—から定義を試みている³⁾が、ことわざの基本的性格として大方の合意を得ているのは、第1に言いならわしであるということ、第2に教訓、諷刺を含むということである。だが、これら2点だけを基準にしてことわざという言語カテゴリーの範囲を限定することはむずかしい。

ことわざが日常の言語領域で用いられることばである点に頼って、「常識的定義」に従ってみよう。

『広辞苑』（新村出編 岩波書店）には、

ことわざ：古くから人々に言いならわされたことば。教訓・諷刺などの意を寓した短句や秀句。

とある。しばらくはこの定義のもとづいて、この定義を構成している要素について検討していこう。

まず、この定義によれば、ことわざは、「古くから」「人々に」「言いならわされた」「ことば」であって、その「ことば」は「教訓・諷刺など」の内容を「短句や秀句」という形式で表現しているものである。このことからわれわれは、ことわざが、過去から現在へと連続して、日常生活を営む「普通の人々」（つまり特定の地位カテゴリー

1) E. サビア, B.L. ウォーフ他著, 池上嘉彦訳『文化人類学と言語学』弘文堂, 1980, p.2.

2) 藤井乙男『諺の研究』講談社学術文庫, 1978, p.20. (更生閣, 1929年出版本の復刻版)

3) たとえば語義に関連した定義のいくつかについては、後述の〔補注1〕参照。

に属する人々、たとえば「専門家」、「知識人」、「高貴な人」などではなく、無名無形の人々、たとえば「庶民」「民衆」「常民」「大衆」といったカテゴリーを付与される人々)によって、語り継がれてきたことばであることを知る。

ここでいくつかの問いが立つ。

〈問い1〉ことわざはどのくらい「古くから」存在しているのか⁴⁾。そしてどれほどの質・量のことわざが現在にも伝承されているのか。

〈問い2〉なぜ「人々」は「教訓・諷刺などの意」を「句」の形式で語り伝えてきたのか。

さて、これらの問いに取り組むにあたって、われわれ、より正確には筆者を含めて(おそらくは)戦後の言語教育を受けてきた世代の人々は再び当惑する。なぜなら、ことわざはその定義上、日常の言語生活に用いられる「基本語」であるとみなしうのに対し、「われわれ」の日常言語感覚では、ことわざはむしろ「古語」に属するからである⁵⁾。従ってその「われわれ」がことわざの世界にアプローチするとき、「われわれ」は、まず第1に、ことわざを日常的に使用し伝承してきた先人たちと日常の共通感覚レベルではストレートに交信できず⁶⁾、第2に、本来話しことばとしてこそ存続していることわざを、書かれたことば(辞典や論文、エッセイなどの文献)を手がかりに解説せざるをえない、という制約に出会う。筆者が独自の厳密な定義をなせないのは、1つには「基本語」としてのことわざの本来の性質と、「われわれ」にとってことわざは「古語」であるということとのギャップ(および、日常レベルの「基本語」を専門レベルの「術語」に変換することの困難)に

由来しているといってもよい⁷⁾。

② 「話されたことば」と「書かれた語」

さて、話しことばとしてこそ、その生き生きとした息吹きを保持することわざに、文献を素材としてアプローチするという場合、この制約はさらに2つの様相でわれわれの前に立ちはだかる。

1つは「文字」と「音声」という伝達メディアの違いそのものから生じる指示・伝達ニュアンス上の制約、2つには、文字使用に精通している人々とそうではない人々との間の社会的差異から生じる情報内容・記録能力上の制約。

第1の制約条件について。ことわざの通常の使用法、その伝達形式は、もっぱら口頭伝達を軸としていた。音声コミュニケーションは一般に、有意味的な単語とそれらの連結様式についての知識の共有によって可能にはなるが、それよりはむしろそれらのことばが用いられる「場」の対面的状況特性と、音の高低、強弱、リズムといった、ことばの韻律上の特徴との認知、解釈によって成り立っている。話されたことばとしてのことわざには、従って、明確に言明された部分に加えて、いわば言外に託された共示的な意味の部分が存在する。たとえば「一姫二太郎」ということわざは、「はじめに女の子を生んで、次に男の子を生むのがよい。(女兒の方が育てやすい。)」という、いわば望ましい産児順を明示したものではあるが、それが現実生活の一場面で、男の子を欲しがっていたのに女の子を授かった親に対して、「一姫二太郎と言うことがある」と説得的な口調で用いられ、それによって親がなるほど納得し慰められれば、このことわざはその明示の意味以外の別のニュアンスを伝えるものとして作用したことになる⁸⁾。

4) この問いの部分的解答については、〔補注1〕参照。

5) ことわざが日常語でなくなりつつあるというのは、「われわれ」だけのことではなさそうである。その傍証については〔補注2〕参照。

6) 「われわれ」がことわざに対して、古めかしく説教じみた(オジン・オバンチックな)イメージを抱きやすいのは、1つには、ことわざが現代では「古語」に等しいということ、もう1つにはことわざが会話の文脈であられるとき、それがもっぱら「われわれ」より年長の人々、エライ人々によって用いられるというところに理由がある。

7) そしてまた、「アリストオトル以後幾多の学者、諺の定義を試みたるも、いずれもその性質の一端を捕えて、巧妙の辞を弄するに過ぎず」と藤井翁に言わしめたのも、これら2つの制約、「日常言語」と「専門語」ないし「古語」との性質の違い、「話されたことば」と「書かれたことば」との性質の違いのなせるわざであろう。

8) もっともこのことわざはその伝統の意味を離れて、「子どもは女の子1人と男の子2人を生むのがよい」といった家族計画、産児調整を示唆するものに一部変容している。そしてこの意味変容のプロセスには、某社の産児制限用品の普及、シェア拡大のためのコマーシャル・メッセージの果たした役割が大きいといわれている。

ところが書かれたことばとしてことわざを扱う場合、われわれはことばから声と息、語られた場の零因気を捨象することによって、ことばの言外の含みの部分を失い、明示的で一義的な意味だけを受け取る。話されたことわざに含まれる話者の心情や場面のニュアンスは、書かれたことわざからほとんど得られない。従ってわれわれはその部分を想像力でもって補わざるをえない⁹⁾。

第2の制約条件、それはことわざの記録をめぐる問題である。もともとことわざの性格からみて、その発明者・継承者は文字、書きことばと必ずしも親密な関係をもっていたとはいえない。いわば純粋に民間で発明・継承されたことわざは、それゆえ必ずしも十分に文字のかたちで記録されたとはいえない¹⁰⁾。これに対して、文字を自由に使い、文字言語と接触することの多い階層の人々の発明・伝達したことわざは、容易に記録される。そしてこれらの人々は、その社会的地位の特性からみて、「常民」ないし「民衆」に対して啓蒙的・教育的・命令的立場にあるから、彼らの残したことわざもまた、由緒正しく格調高い内容を伴う。(たとえば漢籍、仏典に由来するもの、文学書に由来するもの。—写真資料1), 2), 3), 4)参照

第2の制約はまさにそのことに由来する。「古語」としてことわざを扱わざるをえない「われわれ」とっては、ことわざに関する辞典や解説書

が頼みの綱だが、それら文献には、いわゆる成句、格言¹¹⁾に属するもの¹²⁾が少なからず含まれている。これらの類のものを「普通の人々」がどの程度日常的に使用していたのか、またどの程度みずからの生活準則として同化していたのか。そしてこれらのことばは、民間に「自然発生」し「自発的に語り継がれた」ことばとどのような関係にあったのか。これらの問いに対しても、われわれは文献資料から答えを引き出さなければならぬという制約を負う¹³⁾。

【補注1】「ことわざ」の語義

「ことわざ」というのはもともとどのような意味のことばであったのか。この点について、さまざまな説がある。以下にその代表的なものを挙げ、その意味を検討し、あわせて前出の〈問い1〉の一部に解答を与えよう。

「諺」という名は、すでに古代の文献、「古事記」「日本書紀」「風土記」などに見られる¹⁴⁾。鈴木裳三はこれらの資料から、「ことわざは古くは呪詞のたぐいであつた」と推論し、それが「神仰の変化、退化に伴って」「神にききめのあることばから人にききめのあることばに変化してきた」とする¹⁵⁾。

本居宣長の『古事記伝』では「ことわざ」を「許刀^{コトナカ}和邪^{ワジャ}」とし、それは「本は神の心にて、世、人に言せて吉凶^{ヨキアキ}ことを示諭^{シメシヤシ}たまふを云しが、転りては、ただ何となく世間に偏く云ならはしたる言をも云なり」とある¹⁶⁾。本居の説は、「ことわざ」がもともとは「神の

- 9) この想像力はまた誤解、曲解の源泉でもある。だが、「肉声」の届かぬ人々と時間軸をさかのぼって、あるいは空間軸をかけて「対話」できるというのは、書かれたことわざを読むものの特権である。
- 10) ただし、このいわば純粋民間伝承型のことわざを記述・保存する役割を果たしてきた17世紀以降の戯作者たちの存在を、われわれは忘れてはならない。これらの著者たちには武士もいれば町人もいたし、藩お抱えの狂言師(という専門家)もいた。彼らと語り部たる民衆とは、身分階をこえた共感によって結びついていたとみることができる。語り部とその筆記者とは、ことわざを通して間主観性を形成・確認し、事象をリアルに、ときには茶化してとらえることによって、事象認識図式、笑いの感覚を共有するという関係をとり結んでいた。(もともと両者の関係は、時代背景とともに変化するが。) —写真資料5), 6), 7), 8)参照。
- 11) 「成句」、「故事」「格言」の類と「ことわざ」との区別は実際には曖昧である。これら全般に共通するのは、教訓的言及を多く含んでいるという点であるが、前者群がもっぱら教訓で貫かれ、多くの場合出典が明らかで、特定の地名や人名、年代と結びついているのに対し、「ことわざ」は必ずしも厳格な教訓のみを旨としているわけではなく、出所や由来が不明かそれらが独立して語り継がれているところに違いがあるといえよう。
- 12) あるいは格言、金言などを平易なかたちに翻訳したもの。
- 13) きわめて間接的で感覚的な参考素材として、われわれは歴代のことわざ文献を、視覚でとらえてみることもできる。付載した写真を参考にされたい。(写真資料は、藤沢衛彦編『図説日本民族学全集、第2巻、ことば・ことわざ・民謡・芸能編』(高橋書店、1971)から転載した)
- 14) 大島建彦「ことわざ」、『日本民族学大系』第10巻、平凡社、1969、pp.212-213。その他。
- 15) 鈴木裳三、広田栄太郎編『故事ことわざ辞典』東京堂出版、1959、あとがきp.2。
- 16) 本居によれば、「許刀」とは「言」、「和邪」とは「今世にも、神又は死人霊などの崇り」のことであり、この「崇り」は「本は凶^{アノキ}にも吉^{キチ}にもわたる言」であって、「かくて何事もまれ、人の口を仮^カて、神の歌はせたまふを和邪歌と云、言^{イハ}せたまふを言和邪とは云なり」。

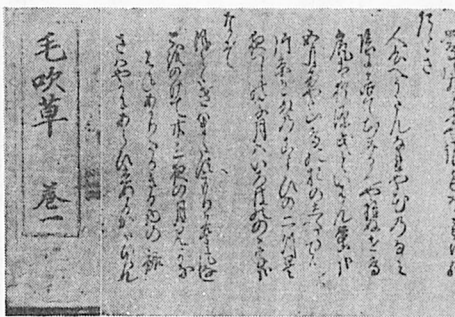
わざ」であったとし、それが次第に世俗化・日常化していったことを指摘し、ことわざの権威の出所を「神」に求めようとしている。ことわざの起源が〈信仰〉に裏づけられていると本居がみなしているといえる。本居説は自然神道の立場から、ことわざを「神意」と結びつけている点で不満は残るが、未開社会において言語が強力な社会統合機能を果たしていたという洞察を含んでいる点で興味深い。

他方、柳田國男をはじめ民俗学の分野では、ことわざを、よりプラグマティックな次元から「言技」とみる。つまり社会生活の具体的諸場面でことばを用いる際の技術が「ことわざ」であるとする。「元来コトワザと

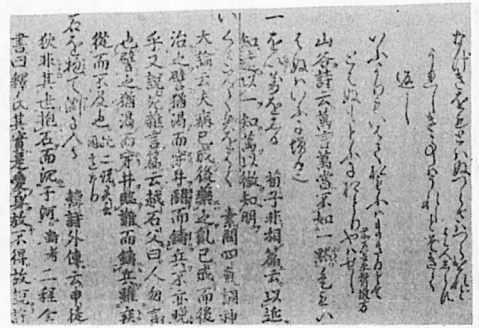
いふ言は言語の技術、即ち言葉の活用全体を包容すべきものであった。」¹⁸⁾

柳田の定義は、ことばをたんにことばとして固定してとらえるのではなく、それが語られている場面との関連でことばをとらえようとしている点で、口承文芸たることわざの説明として説得的である。

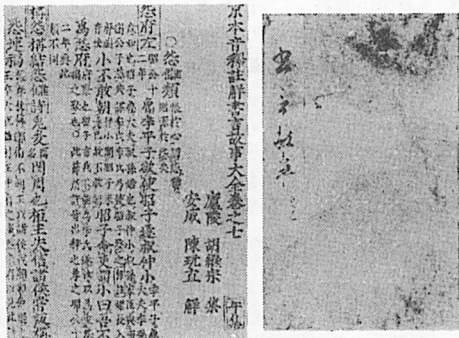
さらに柳田は、ことわざが最初には、「口の武器として、敵を困らせる為に発明せられ、また練習せられたものだ」¹⁹⁾とし、ことわざが笑いという社会的制裁を伴った強力な武器であったとする。そして時代が下るにつれて、ことわざは、その闘争的な側面を維持しつつ、一方では教育的色彩(教訓)を強化し、他方で



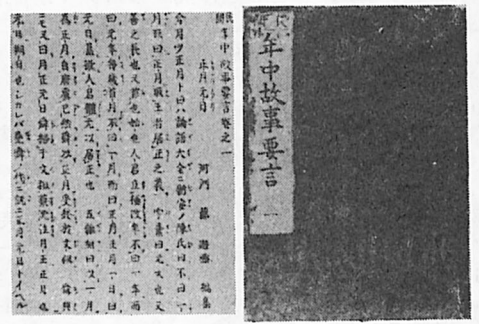
1) 毛吹草 (けふきぐさ) 本書は「毛を吹いて疵を求む」の古諺にならって、それを書名としたもの。「詠留」(ことわざどめ)のことわざをふくめ、704章をあつめている。のちの16-17世紀のことわざ集「乳母」(めもの)、「世話尽」などの板行に大きな影響をあたえた。万治元年(1658)板行。図は本書の表示と本文の一部



2) 諺草 (ことわざぐさ) ことわざ、俗語の由来を、和漢の古典により、その出典・歴史上のことがらを示しているが、本書の解説は、ことわざ、俗語解釈の定説となっている。貝原好古編。元禄14年(1701)板行。7冊。図は、「伊」の部分



3) 書言故事 漢書で、中国のことわざやいいならわしを収録し、注釈したもの。日本のことわざのもととなったものもすくなくない。正しい書名は「京本音釈註解書言故事大全」。胡継宗(集)・陳玩直(解)。8巻14冊。図は巻五の表紙と巻七の巻首



4) 年中故事要言 和漢の史誌、儒書、經典など約200書のなかから、ことわざとなる語句を引用し、季節・風俗などの発生・由来を解説したもの。巻一には引用文献の総目録があげられている。部遊燕編。享保3年(1718)板行。図は、巻一の巻首と表紙

17) ここで社会統合機能とは、ことばの学習そのものによって、ことばの内包が人間をとりまく世界(と人間の内なる世界)の分節化とはば一致するという社会化機能(事象を「命名」するということ)は、それに解釈をほどこすということに等しいと、ことばを使用することによって人間が自他に及ぼす社会統制機能をさす。

18) 柳田國男「口承文芸史考」(1947),『定本柳田國男集』6巻,筑摩書房,1962,p.27.

19) 柳田國男「なぞとことわざ」(1952),『定本柳田國男集』21巻,p.120.

娯楽的色彩（お笑い）を強めていったとする^{20）}。

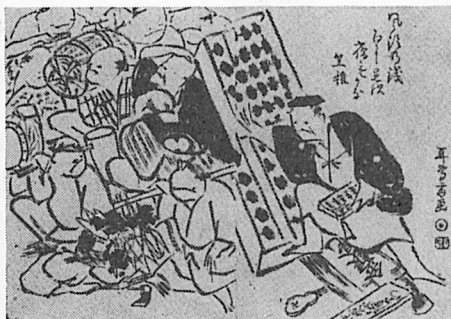
本居説がことばそのもののもつ^{コトダマ}的威力に着目して、ことわざの起源を宗教に求め、柳田説がことばの語られる社会的文脈を重視して、その起源を笑い（による攻撃と「安心」）に求めている点で両者は異なる^{21）}。が、それぞれが異なる立場からことわざの社会統合機能に言及している点を記憶しておく。

ちなみに、ことわざの日常化ないし世俗化が進んだのはいつごろからかということを、これも文献資料をもとに推定するなら、中世、とくに平安末期の説話文学、室町・戦国時代の軍記物、これらの系列に属する

謡曲や浄瑠璃にも、ことわざは引用されているけれども、近世、とくに江戸時代中・後期の、いわゆる庶民文芸（俳諧や狂言、狂歌、狂文の類）^{22）}にことわざが頻出していることを考慮すると、ことわざが日常言語として定着したのは、もっぱら近世以降（おそらくは17世紀以降）であるとみてよいだろう。

〔補注2〕 ことわざに関する最近の文献

ことわざが古語になりつつあることの傍証として、1960年代以降、ことわざに関する辞典、解説書、論文、エッセイが大量に出現しているという事実をあげることができる^{23）}。



5) つべこべ草 「盆と正月がいっしょに来たよう」のさし絵。



6) 教えの小櫓 人びとにいいならわされている多くのことわざの教えを、絵入りで説いた童蒙の書。宝楽亭著。下河辺拾水画。寛政2年(1790)月もみつればかくるなり云々」のさし絵



7) 玉山画譜 「白羽の矢を立てる」のさし絵の秋田の海辺に住むお染という美しい娘があり、ある日美少年が彼女をおとずれわりなき仲になった。たまたま父親が仕事から帰り娘のへやをのぞき見ると、大蛇(だいじゃ)が娘にからみついていた。これはいわゆる「白羽の矢を立てられた」一例で、矢をたてた主は三輪山式蛇神である。



8) 伊呂波歌 (いろはうたえ)いろは四十七文字、1~10までの数字および百万の文字を歌の頭初によみこみ、庶民の教訓としたもの。下河辺拾水画。安永4ね発行。図は、「物わすれするともよしや世の中に我身忘れし人といわれそ」と「四徳とは仁義礼智と心得てかな本にても読みて知るべし」のさし絵

20) 柳田, 同掲書, pp.105-147.

21) その後の研究者たちは、この〈言霊説〉と〈言技説〉を併用している。たとえば折口信夫はことわざを〈うた〉+〈わざ〉, 同じく池田弥三郎は〈童謡〉+〈言語技術〉, 檜谷昭彦は〈信仰〉+〈実用的知識〉とする。(折口信夫全集) 7巻, 中央公論社, 1966.『池田弥三郎著作集』8巻, 角川書店, 1979. 檜谷昭彦『ことわざの世界』日本書籍, 1979.

22) これらを文字化したものとみると、話されたことばを「ひらがな」で記述し、さらに多くのものには絵がほどこされている。一写真資料 5), 6), 7), 8)参照.

23) もちろんこの傾向に関しては出版業界の事情も考慮に入れなければならないだろうが、ことわざに関する文献目

またたとえば、昭和56年3月20日現在で国立国会図書館所蔵のことわざ関連図書86冊の出版年をみると、1910年代が1冊、1920年代なし、1930年代2冊、1940年代4冊、1950年代16冊、そして1960年代に至ると26冊、さらに1970年代のものは33冊となっている²⁴⁾。

これらの数字は、口頭伝承のことわざが文字伝承に依存しつつあるということを間接的に示し、少なくともことわざが日常言語として自明のものでなくなったことを示している。

2. 実験1 書かれたことわざの抽出と分析

「われわれ」のことわざの世界：教訓の世界

① ことわざの抽出手続き

「われわれ」の置かれた時代特性（と、筆者の知的バイアス、とくにことばの好み）というハンディキャップを自覚した上で、「われわれ」が「知っている」（と筆者が判断した）ことわざを抽出して、それらを分析するという作業を試みてみよう。

ことわざの総数は確定しにくい²⁵⁾。膨大なことわざ母集団に内蔵されている豊かな知識在庫を網羅的に汲み出したいという野望をひとまず抑制して、われわれはいくつかの抽出基準を設定し、それらに適合するとと思われることわざだけを取り扱うことにしよう。

〈抽出基準1〉人間が人間に志向する営為についての言及を含むこと

この、多分に曖昧な基準²⁶⁾をもう少し具体化

するために、下位基準を設定しよう。

〈抽出基準2〉以下の言及レベルのいずれかに属すること

1. 個人的行為・態度レベルの言及
 - 1-① 行為選択、態度決定の指針や指令
 - 1-② 人間の行為・態度の様態についての記述
2. 社会関係レベルの言及
 - 2-① 対人交流・交渉にあたっての指針や指令
 - 2-② 自・他の関係状態、複数者の関係状態についての記述
3. 社会集団レベルの言及
 - 3-① 集団帰属にあたっての指針や指令
 - 3-② 社会集団、社会一般の存立状態についての記述

〈抽出基準3〉以下の言及形態を示すこと

- a. 明示的指令命題
- b. 比喩のかたちをとった指令命題
- c. 事象記述のかたちをとるが、指令的ニュアンスを含む命題
- d. 経験則を価値中立的に記述している命題²⁷⁾

次に、抽出のためのことわざ母集団として、以下5冊のことわざ辞典に収められた、延べ18101のことわざを指定する²⁸⁾。

1. 鈴木裳三、広田栄太郎『故事ことわざ辞典』1956（東京堂出版）、収録数12402
2. 金子武雄『日本のことわざ 評釈』1958（大修館書店）、収録数949
3. 井上豊、構江徳明『評釈ことわざ辞典』

録については、金子武雄『日本のことわざ』第4巻、海燕書房、1983、pp.385-394、あるいは穴田義孝『ことわざ社会心理学』人間の科学社、1982、pp.265-272、を参照。

24) 当然、この場合も国会図書館の保存・購入事情を考慮してみなければならないというまでもない。

25) たとえば穴田は「数万あるいはそれ以上」といい（穴田義孝、前掲書、p.9）、最新のことわざ大辞典（『故事・俗信・ことわざ大辞典』小学館、1982）に収められた句の数は「約43000」である。

26) 実際、抽出基準1を拡大解釈すれば、ことわざはすべてこの基準を満たしている。

27) ここで「命題」ということに関していえば、ことわざが、2句切れ、偶数句型式をとる「型」ことばであるという意味では、ことわざはほとんど語彙化した命題であるといえる。ただし、これらの命題は、完全に語彙化してしまえば、実質的に一語となり、その内部構造上のダイナミクスを失ってしまう。従って、ことわざは、その命題性、内部変数間の関数性を維持したまま、あたかも一つの語のようにふるまうという統語的品詞性を有する。

28) これらの文献には収録数が記されていない。そこで筆者の涙ぐましい算出作業が行なわれたわけだが、この、当初は煩しく退屈であった作業は、途中からほとんどマニアックな楽しみに変貌した。

1969 (桜楓社), 収録数1293

4. 創元社編集部編『ことわざ・名言辞典』
1978 (創元社), 収録数2516

5. 渡部昇一監修『現代人のためのことばの知識百科』1981 (主婦の友社), 収録数941

これらの延べにして18101にのぼる「句」²⁹⁾から上記5冊のことわざ註釈を参照しつつ、前述の抽出基準に合致すると思われるものを選んでおいて、これらをもう1つの抽出基準にかける。つまり、

〈抽出基準4〉「われわれ」が「知っている」ものであること

すでに前章で述べたように、ここで「われわれ」とは、典型的には戦後に生まれ育ち、教化された者たちをさすが、より具体的・手続的には、筆者とその協力者たち6名—20代後半から30代前半(1950年生まれから1958年生まれ)までを含み、その大半は相当に長期にわたる学校被教育歴を有し³⁰⁾、現職はさまざま—をさす。

また「知っている」というのは、あくまで聞いたり読んだりした経験があることをさし、日常会話の文脈で使うことがあるということを意味しない。

さて、以上の手続きを経て抽出された「ことわざ」は、その数248、詳しくは論末の〈表1〉を参照されたい³¹⁾。

②抽出された「ことわざ」の特性

抽出過程での基準に、248の「ことわざ」がどのように反応しているかをみてみよう。無論、この分類作業には、筆者のいささか強引な主観的判断も介入している³²⁾。

〈言及レベルの分布〉

1. 個人的行為・態度レベルの言及 113

2. 社会関係レベルの言及 67

3. 社会集団レベルの言及 68

この分布状況をみる限り、抽出された「ことわざ」に関しては、個人的行為・態度に関する言及が最も多く、ほぼ全体の半数を占めている。「ことわざ」の言及レベルが個人的なことがらに比較的集中しているということ、われわれはどう解釈したらよいただろうか。そのことは、ことわざの使用される本来の場面が、日常生活の具体的行為場面であることと無関係ではないだろう。だが、より正確には、本論でわれわれが進めてきた手続きの結果であるといった方がよい。

すなわち、書かれた「ことわざ」とその読者である筆者との対話の場においては、想像上はともかく、読者は現場としての社会的括がりを具象的にはもたず、いうなれば1人である。従って、「ことわざ」の抽出過程では、1人の状況について言及する内容のものを選択しやすく、また多義的な意味をもつ句については、個人レベルに分類しやすいということ、分布状況が示しているといえる。

〈言及形態の分布〉

a. 明示的指令命題 34

b. 比喩のかたちをとった指令命題 66

c. 事象記述のかたちをとるが、指令的ニュアンスを含む命題 69

d. 経験則を価値中立的に記述している命題 79

明示的指令のかたちをとる「ことわざ」が少ないこと、経験則についての記述のかたちをとるのが比較的多いこと、屈折した思考プロセス³³⁾

29) 引用した著書のタイトルをみても明らかなように、ここで母集団とされる「ことわざ」には、厳密な「ことわざ」の定義(があればの話だが)からすれば逸脱するものも含まれている。たとえば故事、名言、あるいは外国の諺の直訳的文章なども、この母集団には含まれているからである。だが、それらもまた、日常語の文脈での「ことわざ」に含まれると解釈して、抽出候補に入れた。

30) 結論を先取りするというなら、「われわれ」のとりわれは、「むずかしいことをより多く知っていることはよいことだ」という学校教育の知的風土を反映しているとみてよい。「われわれ」にとってことわざは、「知っている」必要のあることばではあっても、日常の言語生活で使用する必要のあることばではない。

31) 〈表1〉を概観しただけでも、「われわれ」のことわざについての知識の源泉がほぼ推察できる。

32) ここで解釈、分類の「場」は辞典、ないしは辞典に記されたことわざの作者と筆者との対話場面である。

33) これは1つには、ことわざにタトエ(直喩、暗喩)かたちをとるものが多いことにも由来しているけれども、それよりもむしろ、全体として、ことわざが陳述すべき内容を簡略な形に圧縮したものであることに由来する。従っ

を経て何らかの指令を引き出しうる「ことわざ」が多いこと、これらは一般的にことわざ母集団の傾向をほぼ正確に反映している。

が、この結果もまた、抽出・分類の場の特性を反映している。「ことわざ」は分析の場に供せられている。だから、本来、話しことばの文脈ではたんなることばの綾であったり、ニュートラルな記述命題にすぎなかったりしたものを、読者たる筆者が、そこに何らかの暗号を読みとろうとして（思い入れ過剰、解釈過剰）、「ことわざ」のメッセージに情動的に反応してしまったということは十分に考えられる。

しかも、その間接的なメッセージとして「指令」を受け取っていることを考えるとき、このことは2つのことを示唆する。その1、「ことわざ」が話しことばの文脈から書かれたことばの文脈へ移行するとき、それは規範的言明の要素を増幅させる³⁴⁾。その2、「われわれ」の世代のことわざ観、「ことわざとは教訓に満ちたことばである」というイメージ³⁵⁾が、筆者の背後仮説としてあり、それが分類過程に反映している。

3. 異世代のことわざ集の比較

先学3人のことわざの世界：生活の世界

① 三世代比較のための戦略

「われわれ」世代の存在拘束性の検討はひとまず保留し、先行世代のことわざに関する知的状況を比較のかたちで検討してみよう。

そのための手続きとして、数多くのことわざ研究者のうち、3つの世代を構成する人々を代表する研究者を1人ずつ選出し³⁶⁾、それぞれのことわざ論で取り上げられていることわざをリスト・アップして、そこで共通に取り上げられていることわざ（三者共通、二者共通）を抽出、それらの内容を比較・検討することによって、異なる三世代間の「間主観性」の共有度、その変容をみるという仕方を試みる。

三世代の代表者のプロフィールについては次の通りである。

代表者名	誕生年	取扱いことわざ数	ことわざ収録書の出版年
柳田國男	1875 (明治8)	454	1962(1930, 46, 52) ³⁷⁾
金子武雄	1906 (明治39)	949	1958 ³⁸⁾
檜谷昭彦	1929 (昭和4)	350	1979 ³⁹⁾

なお、三者、二者に共通することわざについては、論末の〈表2〉〈表3〉〈表4〉〈表5〉を参照されたい。

柳田=金子=檜谷に共通することわざの数は18、同じく、柳田=金子が40、金子=檜谷、43、柳田=檜谷、28であった。

このことから、ある程度まで、「世代が接近しているほど、ことわざの知識やことわざへの関心の共有度は高い」とみることができる⁴⁰⁾。

② 言及傾向の分類

さて、抽出したことわざ群の特徴を、次のような基準で分類しよう。

てことわざの受け手は、圧縮され省略された部分を、その場の共感的雰囲気と思考能力のみならず、過去のことわざ体験によって補わなければならない。

- 34) つまり音声言語の統語法より文字言語の統語法が、より限定的、固定的であるということが、言及内容に規範性を付与する。
- 35) この「われわれ」のことわざ観と、たとえば柳田國男のことわざ観「ことわざの本質は笑いである」との隔たり大きさ。本来、ことわざに付随していた笑いの要素がどの言語領域へ移転したかは後述する。そして、この〈教訓の世界〉と〈笑いの世界〉の対立は、ことわざの〈両義性〉へと筆者の関心を向かわしめるが、紙面の都合上、別記する。
- 36) この選出には少しく悩んだ。というのは、近年のことわざ研究者たちの多くは、明治生まれの人々だからである。筆者としては、異なる世代（典型的には親子関係を構成しうる年代的差異層）に属し、それぞれのことわざの言語教育・言語生活を経験した人々を、それぞれ1人ずつ選びたいと考えていた。
- 37) 柳田國男『定本柳田國男集』6.7.20.21.29巻。（ ）内はオリジナル出版年。
- 38) 金子武雄『日本のことわざ評釈』大候館書店
- 39) 檜谷昭彦『ことわざの世界』日本書籍
- 40) 「ある程度まで」としたのは、金子の取り上げていることわざ数が、柳田、檜谷と比べてはるかに多く（いずれに対しても2倍以上）、従って金子とペアにした場合、共通することわざは当然多くなるからである。従って、厳密には上述の共通ことわざ数から仮設した本文中の命題は一般性をもたない。

〈言及形式〉

直言 — 叙述型
 — 命令型

比喩⁴¹⁾ — 人間 (比喩素材として)
 — 動物
 — 植物
 — 生活関連物資

笑いを伴う)

娯楽的笑い (軽口, など, しゃれなど)

〈適応領域⁴²⁾〉

自己

他者 (たち)

制度 (身分制度, 経済制度, 社会集団統合原理など)

自然

〈言及内容〉

自然環境への適応 (季節, 天候, 農事, 行事など)

社会的経験則 — 歴史的帰結
 — 人間関係・人情

警句

批評 (他人の言動や特定の事態について)

三代世間 4 群のことわざが, 以上の分類軸の下にどのように分布するかについては〈表 I〉〈表 II〉〈表 III〉に記した。なお, 個別のことわざへの適用例は〈表 2〉~〈表 5〉に併記した。

③ 言及傾向の特徴

言及形式, 言及内容, 適応領域の各項目への分布を, 三者組み合わせ別にみてみよう⁴³⁾。

〈表 I〉 言及形式の分類

			柳田=金子=榎谷		柳田=金子		金子=榎谷		柳田=榎谷	
直言	叙述型 命令型		10	7 3	11	8 3	32	28 4	10	7 3
			8	1 3 0 4	31*	7 9 9 6	11	4 2 2 3	20*	5 6 2 7
比喩	人間			1		7		4		5
	動物			3		9		2		6
	植物			0		9		2		2
	生活関連物資			4		6		3		7

※柳田=金子組, 柳田=榎谷組については, それぞれ, 比喩型のうちに, 1句に 2種のタトエ素材が含まれていたため, ことわざ数より分類数が2ずつ多くなっている

〈表 II〉 言及内容の分類

			柳田=金子=榎谷		柳田=金子		金子=榎谷		柳田=榎谷	
自然環境への適応			2		2		1		5	
社会的経験則	歴史 人情・関係		8	4 4	14	5 9	30	22 8	5	2 3
		警句	5		5		6		2	
批評			2		18		5		13	
娯楽的笑い			1		1		1		3	

〈表 III〉 適応領域の分類

	柳田=金子=榎谷	柳田=金子	金子=榎谷	柳田=榎谷
自己	7	5	5	1
他者(たち)	2	7	8	2
制度	3	4	10	0
自然	2	3	1	5

41) 比喩は明喩, 暗喩を含む。

42) 行為者の生活世界のどの領域への適応についての指示を与えているかをみる。明示的に受け手の反応を喚起すると思われるものだけを選ぶ。なぜなら, たとえば「批評」は, 他人の行為や事態のいきさつを批評することを通じて, 自分自身の行為・態度を反省したり, 今後の事態に備えることをさせるという適応パラダイムとして作用するが, このような間接的指示を示すものを適応領域でマークすることはひかえた。

43) 3者の取り上げたことわざの数はかなり異なるから, ここでは 4 組の分布状況を数量でそのまま比較することはできない, そこで各組の内部での分布特性にもつぱら注目することにする。

〔柳田=金子=檜谷〕組

〈言及形式〉 直言型：比喩型=10：8
 ただし、全体に対する命令型の比率が $\frac{3}{18}$ と、他の組み合わせ群（ $\frac{3}{40}$, $\frac{4}{43}$, $\frac{3}{28}$ ）と比べて高い。

〈言及内容〉 警句と社会的経験則が多い。
 ことわざの教訓的要素があらわれている。ここでも警句の比率の高さ（ $\frac{5}{18}$, 他の組は $\frac{5}{40}$, $\frac{6}{43}$, $\frac{2}{28}$ ）がめだつ。

〈適応領域〉 個人の行為・態度領域に関するものが多い。

〈全体的特徴〉 ことわざの教訓としての性格の強調。観念的な人生・処生訓ともなることわざ集。

〔柳田=金子〕組

〈言及形式〉 直言型：比喩型=11：31
 比喩型のうち、タトエに使われている素材に、人間（髪結い、乞食、子など）、動物、植物の多いのが特徴的である。

〈言及内容〉 批評と社会的経験則が多い。社会的経験則では、歴史的帰結としての秩序より、人情の機微や人間関係の通常を叙述しているもの⁴⁴⁾が多い。

〈適応領域〉 他者への対応の仕方についての言及が多い⁴⁵⁾。が、全体として生活界全般への適応術を示しているとみることができる。

〈全体的特徴〉 日常的な対話場面での話法としてのことわざの性格を反映する。また、生活全般への適応術ともなることわざ集。

〔金子=檜谷〕組

〈言及形式〉 直言型：比喩型=32：11
 直言型のうち、叙述型のものが多いのが特徴的である。

〈言及内容〉 社会的経験則についての言及が多いこと（ $\frac{30}{43}$ ）、とりわけ歴史的な帰結への言

及が多い（ $\frac{22}{30}$ ）のが特徴的である。

〈適応領域〉 他者と制度的枠組とに関する言及と（間接的）指示が多い⁴⁶⁾。

〈全体的特徴〉 生活世界の法則性、準則を説く。説得を旨とすることわざ集。

〔柳田=檜谷〕組

〈言及形式〉 直言型：比喩型=10：20
 比喩型の比率が最も高いのがこの組の特徴である。タトエの素材は、生活関連物資⁴⁷⁾、動物、人間、植物の順。

〈言及内容〉 批評の数が多いこと（ $\frac{13}{28}$ ）、その他の組と比較して、自然環境への適応の仕方を指示しているものと、娯楽的笑いを提供しているものが多いことが、特徴的である。

〈適応領域〉 言及内容を反映して、ここでも当然、自然への適応を指示しているものが多い。

〈全体的特徴〉 自然のなかで生きる人間たちのくらしぶりを反映する。また、ウィットとユーモア、笑いのことわざ集。

〔補注3〕 三世代間主観性のニュアンス

試みに、4組の全体的特徴と、〈表6〉に示した各組の命令型のことわざ⁴⁸⁾とを組み合わせて、各組のことわざから「われわれ」が読み込むイメージを、標語的に示してみよう。

〔柳田=金子=檜谷〕組：謙虚を旨とする人生訓

〔柳田=金子〕組：プラグマティックな処生術

〔金子=檜谷〕組：慎重な言動マニュアル

〔柳田=檜谷〕組：シンプル・ライフ、陽気ぐらしのすすめ

4. ことわざと間主観性

実験1と実験2の結果の検討

① それぞれの背後仮説

先学三者がことわざを採取・選択・論評するに

44) たたとえば「逃げた猪はいかい」、「見ぬが花」、「頼めば鬼も人食わぬ」、「泣く子も目を見る」など。

45) 「噂をすれば影がさす」、「皿なめた猫が科を負う」、「人とする亀は人とられる」など。

46) たたとえば「うそも追従も世渡りのため」、「女は三界に家なし」、「すまじきものは宮仕え」、「遠くの親類より近くの他人」など。

47) たたとえば「飯」「杓子定木」「小判」。ただし、ここでは「雨」「雪」「氷」「水」も物資のうちに含めている。

48) 興味深いことに、〈表6〉の指令集は、表の左から右へ移行するにつれて、指示内容が具体化する（いいかえれば、その応用範囲が狭くなる）。

あたって、前提としていたことわざ観をみておこう。

柳田にとって、ことわざの本質は〈笑い〉である。この笑いを介して、常民は、他者を「攻撃」し、「教育」し、「楽しみと慰み」を共有してきたという⁴⁹⁾。

金子にとって、ことわざは〈処世の途〉を教示するもので、それは庶民の「実利主義」、「中庸尊重」、「消極性」を反映しているという⁵⁰⁾。

檜谷にとって、ことわざは〈両義的な曖昧さ〉を本質とし、民衆はそこから当該必要な情報を「取捨選択する」ことによって「主体性」を獲得するという⁵¹⁾。

そして、われわれにとって、ことわざは〈教訓〉を本質としていた。

② 背後仮説と生活環境

背後仮説は論者の生活環境と何ほどか関連する。ここで生活環境を、社会・歴史的環境と知的環境とに分けて考えると、先学三者は、知的環境に関して、柳田は民俗学者、金子は上代文学研究者、檜谷は近世文学研究者であるという位置にある⁵²⁾。

社会・歴史的環境に関しても3者は異なる世代に属する。

これらの事情は彼らの共有することわざの世界とどのように関係しているか。

三者、のみならず「われわれ」にも共有されることわざの性質は、教訓である⁵³⁾。

隣接する二世帯間に共有されているものを、言及内容と適応領域から、冒険的に検討しよう。

まず、柳田と金子にとって、ことわざはまだ日常生活で活用されていることばであった。そしてこの日常生活は、人間間交渉のみならず人間と自然事象との交渉をも含んでいた⁵⁴⁾。

次に、金子と檜谷にとって、ことわざは、具体的な生活場面とそこでのことわざ使用例を想定しつつ、それらを（どちらかというとな歴史的な）経験則として総括するものであった⁵⁵⁾。彼らは経験則を叙述的に知らせることわざの説得性を強調する⁵⁶⁾。

柳田と檜谷、世代的にみてこの両者は日常的な生活の場をそれほど多く共有していない。彼らは、民間伝承の採取・研究と近世文学研究というそれぞれの営為を通して、知的世界としての「近世」を共有し、その共通の地平から、口承文芸のエートス、笑いと、常民の知恵とをことわざのうちにみる。

③ 保留された問い

ことわざが日常の言語生活から生まれ、そこで継承されてきたことばであれば、日常生活の場の変容とともに、ことわざの質と量とは変容する。たとえば、先学三者に（日常レベルまたは知識レベルで）共有されている「木六竹八堀十郎」ということわざは、「われわれ」にとってほとんど死語に近い。また、たとえば、「朝焼けは雨、夕焼けは晴れ」「朝虹養ほごせ、夕虹養巻け」という気象への適応のための民間伝承を知らずとも、「われわれ」には気象台という制度的組織が発表する専門的知識にもとづく天気予報が与えられる。

49) この笑いは、たんに話者の言語技術への讃嘆ではなく、その背後に間主観的な〈安心〉を本願としていた。（『定本柳田國男集』7巻、「笑いの本願」、その他）。

50) 金子『日本のことわざ』4（1983）「諺の思想的基盤」。金子はまた、ことわざは庶民の〈安全〉主義の所産であるとする。

51) 檜谷『ことわざの世界』、「ことわざの構造」。

52) 従って、ここから、3者の間主観性に対して、ことわざについての民族学と国文学との態度の相違が影響していると推測することもできる。ちなみに、金子はとくに万葉集、古事記、延喜式等を専攻、檜谷には井原西鶴に関する著書がある。

53) そして「われわれ」が先学3者に共通して見出すのは、口承文芸ことわざの採取・保存に対する意欲と責任感である。

54) 柳田、金子の生年と著書の出版年からみて、彼らに共有されている社会、歴史的環境は、第2次大戦前の村落型社会生活であるとみることができる。

55) 彼らに共有されている社会・歴史的環境は、戦前と戦後の、（だがまだ高度経済成長以前の）変動期日本である。彼らに共有することわざのうちに、一種暗い諦念を読み取るのは筆者のみだろうか。

56) それは「われわれ」からみると、消え去りゆくものとしてのことわざへのノスタルジアとも受け取れる。

57) 老婆心ながら、これは「木は（陰暦）6月に切るのがよく、竹は8月に切る性とがよいし、また、土堀は乾燥した10月に塗るのがよいという意を、人名に擬したことば」である。

現代の日常生活から消失しつつある物資や事象の「名」⁵⁸⁾を含むことわざは日常言語生活から消失しつつある⁵⁹⁾。とすれば、異世代に継承されるのは、時代制約的なモノ・コト・ヒトへの名称を含まないことわざに限定されやすく、しかも伝承ルートは、例外を除いて、年長者から年少者へというパターンをとるから、教訓的な言及を含むことわざに限定されやすい。そして、たとえば柳田の主張するところの話しことばとしてのことわざのもつ笑いの要素は、ことわざが書かれたことばとして専門的な記述・分析の対象となることによって、「知的」要素として凍結する⁶⁰⁾。

われわれはそのプロセスの1部を、実験1と実験2を通してみてきた。

紙面がつきた。残念ながら、1章で提起した第2の問いと2つの実験から引き出された新たな問いを検討する余裕がない。保留された問いを課題として提示しておくことにしよう。

〈問い2〉なぜ人々は教訓・諷刺などの意を、句の形式で語り伝えてきたのか。

- a) その言及上の効果は何か。
- b) 型の歴史的変容はあるか。

〈問い3〉直言と比喩との用法の使い分けは何に由来するのか。

- a) それぞれどんな言及効果をもつのか。
- b) 用法選択に社会的背景は影響しているか。

〔メモ〕1-a) 短縮、圧縮の効果——言語行動の攻撃性の屈折、攻撃の強化と緩和、記憶のための工夫。

1-b) 句調と社会生活のリズムとの関係。

2-a) b) 比喩——場と素材の転用、暴露と陰蔽。

2-b) 文字の記録性と音声の一回起消失性。事象記述重視から情動喚起へ（言語の統制力の明確化）。

〈表1〉抽出したことわざ

		ことわざ	〈言及領域〉*	〈言及様式〉**
あ	1	合縁奇縁	2 - ②	d
	2	逢うは別れのはじめなり	2 - ②	d
	3	悪事千里	1 - ①	c
	4	悪事身にかえる	1 - ②	c
	5	悪に強きは善にも強し	1 - ②	d
	6	明日の百より今日の五十	1 - ①	b
	7	明日は明日の風が吹く	1 - ②	c
	8	仇は恩で報ぜよ	2 - ①	a
	9	あとは野となれ山となれ	1 - ②	b
	10	雨降って地固まる	3 - ①	b
	11	案ずるより生むがやすし	1 - ①	a
い	12	言うは易く行ふは難し	1 - ①	c
	13	家柄より芋がら	2 - ②	b
	14	石の上にも三年	1 - ②	b
	15	石橋も叩いて渡れ	1 - ②	d
	16	衣食足りて礼節を知る	1 - ②	d
	17	いそがばまわれ	1 - ①	a
	18	一蓮托生	2 - ②	d

※ 〈言及領域〉の記号は、〈抽出基準2〉の記号内容に対応する。

※ 〈言及様式〉の記号は、〈抽出基準3〉の記号内容に対応する。

58) たとえば上述「朝虹養ほごせ」の「養」、あるいは「鎌をかたげた乞食は来ない」の「鎌」、その他、「膏薬」、「糶杖味噌」、「雪仏」、「土仏」（この二体の「仏」がはたして実物として存在するかどうかさえ筆者は知らない）、「紺屋」、「鍛冶屋」、「髪結い」などなど。

59) また、現代の言語コードに照らして、あるいは発言の社会的文脈からみて、差別発言、問題発言とみなされうるものも、会話の場には現われにくくなるだろう。たとえば「朝跳の夕跳」、「蛙の子は蛙」、「女は三界に家なし」、「女房と畳は新しいほどよい」、「朝の雨と女の腕まくり」など。

60) 現代の日常言語にも笑いはある。が、それは人々のことわざの交流を介してではなく、1つには（筆者の仮説としては、）人々のマス・メディアとの接触によって成り立つ。

	19	一寸の光陰軽んずべからず	1 - ②	a
	20	一寸の虫にも五分の魂	2 - ②	b
	21	犬も朋輩, 鷹も朋輩	3 - ①	b
	22	命あつての物種	1 - ②	c
	23	命長ければ恥多し	1 - ①	d
	24	井の中の蛙 大海を知らず	1 - ②	b
	25	一将功なつて万骨枯る	3 - ②	d
	26	今のなさがのちの仇	2 - ①	c
	27	色の世の中 苦の世界	3 - ②	d
	28	いわぬが損	1 - ①	c
	29	いわぬが花	1 - ①	b
	30	陰徳あれば陽報あり	1 - ②	c
う	31	魚心あれば水心	2 - ①	b
	32	浮世に苦勞のない者はない	3 - ①	d
	33	浮世の義理では是非がない	3 - ①	c
	34	浮世の苦楽は紙一重	3 - ②	d
	35	浮世は金が命	3 - ②	d
	36	浮世は心次第	3 - ②	d
	37	浮世は回る水車	3 - ②	d
	38	浮世は夢	3 - ②	d
	39	氏より育ち	1 - ②	c
	40	うそつきは盗人のはじまり	1 - ①	c
	41	うそも方便	1 - ②	c
	42	移り変わるは世の習い	3 - ②	d
	43	移れば変わる世の習い	3 - ②	d
	44	馬には乗ってみよ, 人には添うてみよ	2 - ①	a
	45	恨みに報いるに徳をもってす	2 - ②	c
え	46	縁と月日は末を待て	2 - ②	a
	47	縁なき衆生は度し難し	2 - ②	d
	48	縁は異なるものあじなもの	2 - ②	d
	49	遠慮は損料	2 - ①	c
お	50	溺れる者はわらをもつかむ	1 - ①	b
	51	己を以て人を重る	1 - ②	c
	52	終わりよければすべてよし	1 - ②	d
か	53	飼犬に手をかまれる	2 - ①	b
	54	隗より始めよ	1 - ①	a
	55	駕籠に乗る人擔ぐ人 そのまた草履を作る人	3 - ②	b
	56	勝つも負けるも時の運	3 - ②	d
	57	勝つてかぶとの緒をしめよ	1 - ②	a
	58	勝てば官軍 負ければ賊軍	3 - ②	d
	59	渴しても盗泉の水を飲まず	1 - ②	b
	60	河童の川流れ	1 - ②	b
	61	蟹は甲に似せて穴を掘る	1 - ②	b
	62	金の切れ目が縁の切れ目	2 - ①	c
	63	禍福はあざなえる縄の如し	3 - ②	d
	64	壁に耳あり 障子に目あり	2 - ①	b
	65	果報は寝て待て	1 - ②	a
	66	艱難汝を玉にす	1 - ②	c
き	67	聞くはいったんの恥 聞かぬは末代の恥	1 - ①	c
	68	昨日の友は今日の怨	2 - ②	d

	69	窮すれば通ず	1 - ②	d
	70	雉子も鳴かずば打たれまい	2 - ①	b
	71	義を見てせざるは勇なきなり	1 - ①	d
く	72	腐っても鯛	1 - ②	b
	73	臭いものにほふたをせよ	1 - ①	a
	74	口より出せば世間	1 - ①	c
	75	・苦しい時の神頼み	1 - ②	d
	76	君子危きに近寄らず	1 - ②	c
	77	君子は和して同せず 小人は同して和せず	2 - ②	c
	78	群盲象を撫ず	3 - ②	d
け	79	鶏口となるも牛後となるなかれ	3 - ①	a
	80	芸は身を助ける	1 - ②	d
	81	芸は身の仇	1 - ②	d
こ	82	光陰矢の如し	1 - ②	c
	83	後悔先に立たず	1 - ②	c
	84	巧言令色すくなし仁	2 - ②	c
	85	好事魔多し	3 - ②	c
	86	郷に入りては郷に従え	3 - ①	a
	87	弘法にも筆の誤り	1 - ①	b
	88	虎穴に入らずんば虎児を得ず	1 - ②	b
	89	ころばぬ先の杖	1 - ②	b
さ	90	先んずれば人を制す	2 - ①	c
	91	猿も木から落ちる	1 - ①	b
	92	去る者は追わず 来る者は拒まず	2 - ②	c
	93	去る者は日々に疎し	2 - ②	c
	94	さわらぬ神にたたりなし	1 - ②	b
	95	三人よれば人中（公界）	3 - ②	c
	96	三人よれば文珠の知恵	3 - ①	c
し	97	下いびりの上へつらい	3 - ①	c
	98	失敗は成功のもと	1 - ①	d
	99	習慣は第二の天性	1 - ②	d
	100	朱に交われれば赤くなる	2 - ②	b
	101	十人十色	3 - ②	d
	102	小異を捨てて大同に就く	3 - ①	c
	103	正直は一生の宝	1 - ②	c
	104	正直も馬鹿のうち	1 - ②	c
	105	小事に拘りて大事を忘るな	1 - ②	a
	106	小事は大事	1 - ②	c
	107	人事をつくして天命を待つ	1 - ②	d
す	108	好きこそ物の上手なれ	1 - ①	d
	109	過ぎたるはなお及ばざるが如し	1 - ②	c
	110	すまじきものは宮仕え	3 - ①	d
	111	住めば都	3 - ①	c
せ	112	世間知らずの高枕	3 - ①	c
	113	世間は張り物	3 - ②	d
	114	世間の毀誉は善悪にあらざ	3 - ②	d
	115	背に腹はかえられぬ	1 - ①	b
	116	梅檀は二葉より芳し	1 - ②	b
	117	船頭多くして船山にのぼる	3 - ②	b
そ	118	袖振り合うも他生の縁	2 - ②	d

	119	損して得とれ	1 - ①	a
た	120	大功を成す者は衆に謀らず	3 - ①	c
	121	起つ鳥あとを濁さず	1 - ②	b
	122	たで食う虫も好きずき	2 - ②	b
	123	他人の飯には骨(とげ)がある	2 - ②	b
	124	他人は時の花	2 - ②	b
	125	楽しみの一年は短くて苦の一日は長い	3 - ②	d
	126	旅の恥はかきすて	2 - ②	d
	127	旅は道づれ、世は情け	3 - ②	d
	128	玉磨かざれば光なし 人学ばざれば道を知らず	1 - ②	d
	129	足ることを知れ	1 - ②	a
	130	短気は損気	1 - ②	c
	131	断じて行えば鬼神もこれを避く	1 - ①	b
ち	132	血は水よりも濃い	3 - ①	d
	133	塵も積もれば山となる	1 - ②	b
つ	134	角を矯めて牛を殺す	1 - ②	b
	135	罪を憎んで人を憎まず	2 - ①	c
て	136	鉄は熱いうちに打て	1 - ①	a
	137	出る杭は打たれる	2 - ①	b
と	138	同舟相救う	3 - ①	d
	139	燈台下暗し	1 - ②	b
	140	同病相憐む	2 - ②	d
	141	道理百遍義理一遍	2 - ①	c
	142	同類相集まる	3 - ①	d
	143	遠くの親類より近くの他人	2 - ②	c
	144	時人を待たず	1 - ②	c
	145	毒をもって毒を制す	2 - ①	d
	146	捕らぬ狸の皮算用	1 - ①	b
	147	隣の白飯より内の粟飯	2 - ②	b
	148	隣の花は赤い	2 - ②	b
	149	泥棒をとらえて縄をなう	1 - ①	b
	150	鳥なき里の蝙蝠	3 - ②	b
な	151	長いものには巻かれる	3 - ①	a
	152	情けに刃向かう刃なし	2 - ②	b
	153	情けは人のためならず	2 - ②	c
	154	泣く子と(も)地頭には勝てぬ	3 - ①	c
	155	習うより慣れる	1 - ①	a
	156	ならぬ堪忍 するが堪忍	1 - ②	c
	157	名を取るより得を取れ	1 - ②	a
に	158	人間万事塞翁が馬	3 - ②	b
	159	二兎を追う者は一兎を得ず	1 - ②	b
ぬ	160	盗人にも三分の理あり	1 - ②	b
	161	濡れぬさきこそ露をもちとえ	1 - ①	a
ね	162	妬みはその身の仇	1 - ②	c
の	163	能ある鷹は爪をかくす	2 - ②	b
	164	のどもと過ぎれば熱さ忘れる	1 - ①	b
は	165	箸と主とは太いのへかかれ	3 - ①	a
	166	恥を思わば命を棄てよ 情を思わば恥を棄てよ	1 - ②	a
	167	始めあることは 後までもある	1 - ①	c
	168	花よりだんご	1 - ②	b

	169	早いが勝	1 - ①	c
	170	早いばかりが能ではない	1 - ①	c
ひ	171	ひそかに謙めて公にほめよ	2 - ①	a
	172	人ある中に人なし	3 - ②	d
	173	人衆ければ天に勝つ	3 - ②	d
	174	人材木になるな	2 - ①	a
	175	人と器はありあわせ	2 - ①	c
	176	人のうわさも七十五日	2 - ②	d
	177	人の踊るときは踊れ	2 - ①	a
	178	人の口に戸は立てられぬ	2 - ①	d
	179	人の心は九分十分	3 - ②	d
	180	人の心は面の如し	3 - ②	d
	181	人の情けは世にある時	3 - ②	d
	182	人のふり見てわがふり直せ	1 - ①	a
	183	人は情けの下に立つ	3 - ②	c
	184	人は人中	2 - ②	a
	185	人を呪わば穴二つ	2 - ①	c
	186	人を見て法を説け	2 - ①	a
	187	人を見れば盗人と思え	2 - ①	a
	188	人は一代名は末代	1 - ②	c
ふ	189	覆水盆にかえらず	1 - ②	b
	190	武士は食わねど高楊枝	2 - ②	d
	191	船は船頭にまかせよ	2 - ①	b
	192	船は帆でもつ帆は船でもつ	3 - ②	b
	193	分相応に風が吹く	1 - ②	b
へ	194	下手の横好き	1 - ①	c
ほ	195	僧主憎けりゃ袈裟まで憎い	2 - ②	d
	196	誉められるより毀られるな	2 - ①	a
	197	誉める人には油断すな	2 - ①	a
ま	198	蒔かぬ種は生えぬ	1 - ②	b
	199	曲がらねば世が渡られぬ	3 - ②	d
	200	負けるが勝	2 - ①	c
	201	待てば海路の日和あり	1 - ①	b
	202	迷わぬ者に悟りなし	1 - ①	c
	203	迷わんよりは問え	1 - ①	a
	204	丸い卵も切りよで四角、ものも言いよで角が立つ	2 - ①	c
み	205	身から出たさび	1 - ①	c
	206	身さえ心に任せぬ	2 - ①	c
	207	三つ子の魂百まで	1 - ②	b
	208	見ての極楽 住んでの地獄	3 - ①	d
	209	みるほど頭をさげる稲穂かな	1 - ②	b
	210	身ほど可愛いものはない	1 - ②	d
	211	身を捨ててこそ 浮かぶ瀬もあれ	1 - ②	c
む	212	昔は今の鏡	1 - ②	d
	213	昔は昔 今は今	1 - ②	d
	214	無理が通れば道理がひっこむ	3 - ②	d
も	215	物言えば唇寒し秋の風	1 - ①	b
	216	物言わぬは腹ふくるわざ	1 - ①	d
や	217	役人と木片は立てるほどよし	2 - ①	c
	218	柳に雪折れなし	1 - ②	b

	219	山高きが故に貴からず	1 - ②	b
よ	220	用ある時の地蔵顔 用なき時の閻魔顔	2 - ①	d
	221	欲に頂きなし	1 - ②	d
	222	世の中に義理よりつらいものはない	3 - ②	d
	223	世の中にこわいものなし	3 - ②	d
	224	世の中はなるようにならぬ	3 - ②	d
	225	世の中は嘘が八分に実が二分	3 - ②	d
	226	世の中は下むいて通れ	3 - ①	a
	227	世の中は盲千人 目明き千人	3 - ②	d
	228	世の中は九分を十分	3 - ①	c
	229	世の中は気の毒の入れ物	3 - ②	d
	230	世はまわりもち	3 - ②	c
	231	寄らば大樹の陰	3 - ①	b
ら	232	楽は苦の種 苦は楽の種	1 - ①	c
	233	来年のことを言えば鬼が笑う	3 - ②	b
り	234	李下に冠を整さず	2 - ①	b
	235	利によりて行えば怨多し	2 - ①	c
	236	良薬口に苦し 忠言耳に逆う	2 - ②	d
	237	両雄並び立たず	2 - ②	d
る	238	類は友を呼ぶ	3 - ②	d
れ	239	礼儀は下から 慈悲は上から	2 - ②	d
	240	礼も過ぐればへつらいとなる	2 - ①	d
	241	礼も過ぐれば無礼となる	2 - ①	d
ろ	242	論より証拠	1 - ①	d
わ	243	わが田へ水を引く	1 - ①	b
	244	渡る世間に鬼はない	3 - ②	d
	245	我身をつねって人の痛さを知れ	2 - ①	d
	246	禍を転じて福となす	1 - ①	d
	247	我より古を作す	1 - ②	c
	248	和をもって貴しとなす	3 - ②	c

〈表2〉 柳田=金子=楡谷に共通することわざ

こ と わ ざ	言 及 形 式	言 及 内 容	適 応 領 域
1. いそがばまわれ	直・命	警	己
2. 内弁慶 (の外ねずみ)	比・人	批	
3. 男は度胸 女は愛敬	直・叙	経・人	制(性別)
4. 蛙の子は蛙	比・動	経・歴	制(身分)
5. 木六竹八堀十郎	直・叙	自	自
6. 口と財布は締めるが得	直・叙	警	己
7. 転ばぬ先の杖	直・叙	警	己
8. 紺屋のあさって 鍛冶屋の明晩	直・叙	批	
9. 善は急げ	直・命	警	己
10. 損して得とれ	直・命	警	己
11. 他人の飯は白い	比・物	経・人	己
12. 出る杭(釘)は打たれる	比・物	経・歴	他
13. 隣の糶杖味噌	比・物	経・人	他
14. 鳥なき里の蜩蟬	比・動	経・歴	制(共同体)
15. 二階から目薬	比・物	笑	
16. 逃がした魚は大きい	比・動	経・人	
17. 身から出た錆	直・叙	経・歴	己
18. 桃栗三年柿八年	直・叙	自	自

〈表3〉 柳田=金子に共通することわざ

こ と ・ わ ざ	言及形式	言及内容	適応領域
1. 朝跳の夕跛	比・人	批	
2. 朝雨に傘いらず	直・叙	自	自
3. あぶない事は怪我のうち	直・叙	警	己
4. 医者の不養生	直・叙	批	
5. 内蛤の外蜆	比・動	批	
6. 馬に乗るまでに牛に乗れ	比・動	警	己
7. 噂をすれば影がさす	直・叙	経・人	他
8. 瓜のつるになすびはならぬ	比・植	経・歴	制(成)
9. 椽の下の舞	比・物	批	
10. 榎の実が三猿なっても木は棕	比・植	批	
11. 負った子を人に尋ねる	比・人	批	
12. 置かぬ棚を探す	比・人	批	
13. 岡目八目	比・人	経・人	制
14. 髪結いの乱れ髪	比・人	批	
15. 器用貧乏人宝	直・叙	経・歴	制(共同体)
16. 義理張るより頬張れ	直・命	警	己
17. 鍬をかたげた乞食は来ない	比・人	経・歴	制(経)
18. 紺屋の白袴	直・叙	批	
19. 細工は流々仕上げを見よ	直・命	笑	
20. 皿をなめた猫が科を負う	比・動	経・歴	他
21. 十分はこぼれる	比・物	警	己
22. 西瓜は土で作れ 南瓜は手で作れ	直・叙	自	自
23. 頼めば鬼も人食わぬ	比・動	経・人	他
24. 提灯で餅をつく	比・物	批	
25. 月とすっぽん	比・動	批	
26. 土仏の水遊び	比・物?	批	
27. 燈台もと暗し	比・物	経・人	自
28. 泣く子も目を見る	比・人	経・人	他
29. 逃げた猪はいかい	比・動	経・人	
30. 糖に釘	比・物	批	
31. 飄箆で鯉を押える	比・動・植	批	
32. 人の牛蒡で法事する	比・植	批	
33. 人とのる亀は人にとられる	比・動	経・歴	他
34. 蒔かぬ種は生えぬ	比・植	警	己
35. 見ぬが花	比・植	経・人	他
36. 柳の下の泥鰌	比・動・植	批	
37. 山の芋をかば焼にする	比・植	批	
38. 雪仏の湯なぶり(水遊び)	比・物?	批	
39. 養生に身が痩せる	直・叙	経・人	己
40. 呼ぶよりそしれ	直・命	経・人	他

〈表4〉 金子=檜谷に共通することわざ

こ と わ ざ	言 及 形 式	言 及 内 容	適 応 領 域
1. 朝焼けは雨 夕焼けは晴れ	直・叙	自	自
2. あばたもえくぼ	比・人	批	
3. 一瓜実に二丸顔	直・叙	経・人	
4. 一押二金三男	直・叙	経・人	
5. 言わぬは言うにまさる	直・叙	経・人	己
6. 魚心あれば水心	比・動	経・人	他
7. うそつきは泥棒のはじまり	直・叙	警	己
8. うそも追従も世渡りのため	直・叙	経・歴	制
9. 縁は異なるもの味なもの	直・叙	経・人	他
10. 負うた子に教えられ浅瀬を渡る	直・叙	経・人	
11. 男は鬨をまたげば七人の敵あり	直・叙	経・歴	制(性別)
12. 鬼も十八 番茶も出花	比・植	経・人	
13. 親馬鹿 子馬鹿	直・叙	経・人	
14. 女は三界に家なし	直・叙	経・歴	制(性別)
15. かわいい子には旅をさせよ	直・命	警	
16. 聞いて極楽見て地獄	比・人	経・人	己
17. 今日人は人の上 明日は我が上	直・叙	経・人	他
18. 義理と禪かかされぬ	直・叙	経・歴	他
19. 口は禍の門	直・叙	警	他
20. 事は言いなし	直・叙	経・人	
21. 酒は飲むとも飲まれるな	直・命	警	己
22. 酒は百薬(毒)の長	直・叙	経・人	
23. 知らぬが仏	比・人	批	
24. すまじきものは宮仕え	直・叙	経・歴	制(組)
25. 世間は張り物	直・叙	経・歴	制
26. 遠くの親類より近くの他人	直・叙	経・人	制(家)
27. 遠目山越し笠の内	直・叙	経・歴	
28. 豆腐に鋏	比・物	笑	
29. 鷹が鷹を生む	比・動	批	
30. 隣の花は赤い	比・植	経・人	
31. 泣く子と地頭には勝たれぬ	比・人	経・歴	制(身)
32. 泣いて育てて笑うてかれ	直・命	経・人	制(家)
33. 女房と畳は新しいほどよい	直・叙	経・人	制(家)
34. 花より団子	比・物	批	
35. 人のうわさも七十五日	直・叙	経・人	他
36. 人の禪ですもうをとる	比・物	批	
37. 見栄張るより頬ばれ	直・命	警	制(経)
38. 昔は昔 今は今	直・叙	警	
39. 物は言いよう	直・叙	経・人	他
40. 物は言いなし 事は聞きなし	直・叙	経・人	他
41. 夜目遠目笠の下(内)	直・叙	経・人	
42. 理屈と膏薬はどこへでもつく	比・叙	経・人	
43. 論より証拠	直・叙	経・歴	他

〈表5〉 柳田=檜谷に共通することわざ

ことわざ	言及形式	言及内容	適応領域
1. 秋の夕焼け鎌を磨げ	直・命	自	自
2. 朝もやの昼ひより	直・叙	自	自
3. 朝の雨と女の腕まくり	比・人・物	笑	
4. 朝虹養ほごせ 夕虹養巻け	直・命	自	自
5. 雨の降る日は天気が悪い	直・叙	笑	
6. 医者のだだ今	直・叙	批	
7. 暗がりに牛を引き出したような人	比・動	批	
8. 食わぬ飯が髭につく	比・物	批	
9. 杓子定木	比・物	批	
10. 釈迦に説法	比・人	批	
11. 足袋は姉はけ 雪駄は妹はけ	直・命	警	
12. 狎がくしゃみをしたよう	比・動	自	
13. 取らずの大関	比・人	批	
14. 捕らぬ狸の皮算用	比・動	批	
15. どんぐりの背くらべ	比・植	批	
16. 流れる水は腐らぬ	比・物	経・歴	己
17. 二月は逃げて走る	比・人	経・人	己
18. 濡れ手で粟	比・植	批	
19. 猫に小判	比・動・物	批	
20. 掃きだめに鶴	比・動	批	
21. 人の口に戸は立てられぬ	比・物	経・人	他
22. 踏めばくぼむ	直・叙	批	
23. 南竹やぶ殿隣り	直・叙	自	自
24. 目の上のたんこぶ	比・人	経・人	他
25. やぶから棒	比・植	笑	
26. 夕鷹に笠を脱げ	直・叙	自	自
27. 油断大敵	直・叙	警	
28. 雪も氷も元是水	比・物	経・歴	

〈表6〉 命令型のことわざ

柳田=金子=檜谷	柳田 = 金子	金子 = 檜谷	柳田 = 檜谷
いそがばまわれ 善はいそげ 損して得とれ	馬に乗るまで牛に乗れ 義理張るより頬張れ 呼ぶより そしれ	かわいい子には旅をさせよ 酒は飲むとも飲まれるな 泣いて育てて 笑うてかかれ 見栄張るより頬張れ	秋の夕焼け 鎌を磨げ 朝虹養ほごせ 夕虹養巻け 足袋は姉はけ 雪駄は妹はけ